



ふるさと再発見 幕末維新と徳地



著者紹介



郷土史家
山田文雄さん
徳地幕末維新歴史放談の会 代表

山口市徳地出身。現役時代は、国語の教師を勤め、山口市宮野の中学校校長を最後に退職。教育委員会勤務のため徳地に派遣された3年間で、中学生向けのふるさと学習資料したことがきっかけで、徳地と奇兵隊の歴史について興味を持つ。退職を機に文献調査や地元の人々を訪ねたり、史跡や昔の道を行ったりといった活動を開始。

現在は「徳地幕末維新歴史放談の会」の代表として維新における徳地奇兵隊の研究と普及に取り組んでいる。

参考：山口市地域版広報紙《ふるさととくち》2016年3月号「とくちで輝く」インタビュー記事

史跡案内板揭示施設《略図》

- 奇兵隊本陣 正慶院
- 膺懲隊本陣 正福寺 (現昌福寺)
- 煩(大砲)隊 妙蓮寺 (現雲相寺)
- 第三銃隊 金徳寺 (現法華寺)
- 徳地勘場 (代官所跡)

【出典：山口市地域版広報紙《ふるさととくち》2015年3月号～2016年3月号】

徳地幕末維新歴史放談の会ガイドと歩く 「奇兵隊史跡めぐり」

山田先生を初めとする放談の会々員による案内で維新ゆかりの地を訪れたい方は山口観光コンベンション協会徳地支部にご連絡ください。(080-2916-8878)

【発行】(一財)山口観光コンベンション協会徳地支部
〒747-0232 山口市徳地伊賀地492-1 ☎080-2916-8878
✉ tokudi2005@yahoo.co.jp 🌐 <http://www.tokudi-kankou.jp/>

【デザイン/イラスト】Yukiko Yamamoto
✉ tsukimorisae@gmail.com 🌐 <http://haniwalife.web.fc2.com/>

1	山内賢之丞通喜 (八坂村出身)の遺髪墓
2	奇兵隊の徳地転陣
3	草莽崛起を訴えた隊則「諭示」
4	堀伏野に置かれた代官所
5	島地と高杉晋作
6	鹿野から串、山畑大野へ ↳ 新山代街道
7	隊士たちの学習 ↳ 船津の水練場跡
8	要塞のような徳地堀の陣構え
9	日本一の軍事力 ↳ 徳地奇兵隊
10	柚木刀迫の砲台跡 ↳ 四境戦争
11	8歳の志願兵 ↳ 島地山畑村
12	徳地の隊中様 ↳ 帰郷した諸隊兵
13	幕末徳地の偶然 ↳ 奇兵隊転陣の意義
14	著者紹介／史跡案内板揭示施設

本書に登場する幕末の人物

山県有朋

徳地在陣奇兵隊トップ。交通の要衝・要害の徳地に本陣、部隊を配置し、新戦法、新式銃の訓練。大田絵堂や石州口戦で拔群の成果。徳地のカワラケツメイ茶を愛飲。

関連史跡 東京橋山荘、京都無鄰菴、小田原古稀庵

高杉晋作

元治元年11月、萩から山口十明亭、徳地の奇兵隊本陣等を訪れ山県らと論議した後、福岡の野村望東尼宅に避難する。翌月、下関功山寺決起。

関連史跡 下関功山寺銅像、防府の望東尼石碑や墓

吉田松陰

高杉、山県など松下村塾門下の志士を導いた思想家、教育家。草莽崛起を訴える。四民参加で銃をとって倒幕へ進む藩の礎となった。

関連史跡 東京世田谷若林、山口萩の松陰神社

大次郎村益

愛媛宇和島藩、徳川幕府にその才能を見出された防府出身の医者。長州藩に帰り兵学、軍事担当となり、四境戦争石州口で指揮を執る。

関連史跡 防府鑄銭司大村神社、東京九段靖国神社

中岡慎太郎

薩長両藩を駆け巡り、その同盟を成し遂げた土佐藩の志士。奇兵隊徳地在陣期間に鳥取から駆けつける。

関連史跡 高知室戸岬の銅像

半七郎

奇兵隊の徳地転陣には8ヶ寺や庄屋など民衆受入の背景があるが、徳地勘場の代官に正義派が多いことも重要。その中で番長く任用。松陰の叔父玉木文之進や実兄の杉民治も徳地の代官に赴任。

徳地在陣前後の関連略年表

明治3	明治2	慶応4 明治1	慶応3	慶応2	慶応1、元治2	元治1、文久4	文久3	和暦
1870	1869	1868	1867	1866	1865	1864	1863	西暦
4	5	1	10	6	5	11 ~ 10	7	月
各地に広がる)	徳地の脱隊騒動事件(県内)	戊辰戦争(鳥羽伏見の戦い、江戸開城、東北戦争、箱館戦争)	大政奉還(徳川幕府の終焉)	第2次長州征伐(四境戦争)石州口の戦い	徳地半大隊(郷土防衛隊)結成、188名参加	「諭示」発出、徳地在陣(10月20日)11月4日)	下関戦争(外国船砲撃事件)1次長州征伐	出来事
					薩長同盟締結(京都薩摩藩邸)	高杉晋作、下関功山寺決起	禁門の変(蛤御門の変)、第	
					代官追放事件(1月14日)	高杉晋作、萩↓山口↓徳地↓富海↓下関↓福岡に逃亡	四国艦隊下関砲撃事件	
					大田・絵堂の戦い(1月6日)19日)			
					摩懲隊等、徳地勘場襲撃・			

山内賢之丞通喜 (八坂村出身)の遺髪墓

シリーズの1回目として八坂出身の山内賢之丞通喜の話を書きましょう。天保13年(1842年)4月18日、長州藩士として彼は八坂村に生まれます。優秀だったので、藩主毛利慶親(敬親)の参勤交代の供に加えられる江戸に行ったり、長州軍艦壬戌丸乗船を命ぜられたり、兵学者大村益次郎に蘭学を学んだりと将来が囁望されていました。ところが「花燃ゆ」で分かるように、幕末、国の様子が急変します。多くの外国船が日本の周りを徘徊するのです。当然、国を守らなければなりません。しかし当時の幕府には、全国の海岸線を守る能力はありません。そ

ここで各大名に自分の藩を守るよう命じます。それは、鎖国中は決して認めなかつた大砲と大型船を造ることを各藩に認める大転換でした。そうした時代の中で事件は起こったのです。

文久3年(1863年)のことです。国内は、「攘夷」(外国を打ち払え!)とナシヨナリズムに沸き立っています。受けて幕府は、全国の藩に外国船を討つよう命じます。5月10日のこと、長州藩は満を持して下関海峡を通り過る外国船に砲撃を始めた。これが下関戦争です。ところが幕府の命に従ったのは長州藩のみでした。この戦いで藩は西



目で当たりにします。6月5日、仏国軍艦は前田砲台を激しく攻撃します。この時、山内賢之丞通喜は前田砲台の警備を命じられていました。長州砲を使い照準を合わせようとした瞬間に、仏国軍艦の砲弾を頭に受けて戦死した(享年22才)のです。

明治の時代を迎える幕末の約17年間で、長州からは1447名の殉難者を出しますが、この初め



ての戦死者が八坂村出身の山内賢之丞通喜でした。彼は今、下関の桜山神社招魂場に吉田松陰、高杉晋作の横、最前列に祀られています。また、彼の遺髪は出身地下八坂の「横野」バス停MAP近くの山裾で静かに眠っています。下関戦争では、他にも徳地出身者が戦った様子が記録に残っています。

全備MAP

詳細MAP

★...現存する史跡

惜しい男をなくした...

奇兵隊の徳地転陣

今回は、徳地にとつて幕末の大事件、「奇兵隊」の徳地転陣について話しましょう。

前回書いた下関戦争で大敗は、長州藩を大きく揺るがしました。それは攘夷（外国を討つ）の無意味さを知らされたことと支配階級である武士のふがいない戦闘の姿を見せつけられたことでした。そんな中、高杉晋作は当時の身分制にとらわれないうまく新しい戦闘部隊を考えていくのです。それが「奇兵隊」（「諸隊」ともいきました。）です。

しかし、この元治元年（1864年）は、長州藩にとつて内にと外にと苦境の内には外国艦隊に負け巨額の補償を求められ

外（京都）には池田屋事件や蛤御門の変（御所に発砲した事件）が起こりました。その結果、朝廷は幕府に対して長州を討つよう命じてくるのです。当然ですが、藩内では事件や対応を巡って激しい対立が起こりました。俗論派（保守）、正義派（革新）と呼ばれる権力争いがそれです。やがてその争いは、静かな「徳地を激しい渦に巻き込んでいきました。椋梨藤太は正義派を厳しく弾圧し、奇兵隊を含む諸隊に解散を命じます。これが「諸隊解散命令」です。「正義派が消える！」周布政之助や家老の清水清太郎は危機感を募らせ、三田尻の警備に着いていた奇兵隊を徳地に転陣させてい

くのです。この時、諸隊が21ありましたが、奇兵隊と膺懲隊の2隊（200名〜250名）のみが解散命令を蹴つて、この年の10月20日に徳地へ転陣して武装配置を決めました。隊士の合い言葉は「徳地の用い合戦」だったといひます。



小古祖 正慶院（本陣）MAP



庄方 金徳寺（第三銃隊）MAP



徳地奇兵隊の陣配置

出典：山口観光コンベンション協会徳地支部HP

★…現存する史跡 ☆…名称が変わった史跡

草莽崛起を訴えた隊則「諭示」

今回は、正慶院MAPで登せられた有名な「諭示」についてお話します。

元治元年（1864年）10月20日（旧暦）、三田尻から転陣をしてきた奇兵隊・膺懲隊は、堀地区で戦闘態勢に入りました。そして堀の伏野と小古祖で剣撃訓練、銃陣訓練（奇兵隊日記）を行います。長い間、静かな生活が続いてきた徳地の人々には、突然にやって来た諸隊の姿はどのように映ったのでしょうか。「銃を持った怖ろしい軍隊？」「ならず者の集団？」と多くの人が恐怖や不安・不信におののいたことでしょう。

しかし下関戦争で従来の武士集団では戦えない



諸隊の本陣跡案内柱 MAP

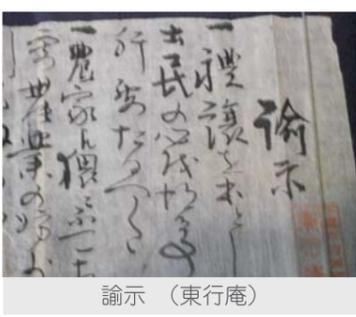
いことを知った高杉晋作は、自分を離れて「志のある者が銃を持って戦うことを考えました。吉田松陰の「草莽崛起」とそれを支える人々の出現を願ったのです。徳地へやって来た奇兵隊・膺懲隊の幹部たちは、自分たちがどのような姿勢でこれから戦おうとするのかを示すため新しい軍隊規則を作りました。これが「諭示」です。そして本陣とした正慶院に幹部を集めて書き写させ、全軍の一人一人に徹底さ

せたのです。全文が8条で出来ています。概略は、「みだりに農家に立ち寄らず、牛馬などに道で出逢つたら、道べりによけて早く通らせること」「山林の竹・木・櫨・楮はいうまでもなく道べりの草木も切り取ってはならぬ」など、当時では考えられないほど農民に細かな配慮をし、「戦うためには人心をつかむことが大事。人心をつかむためには各人が正しい行いをし、人々がそれを見習うようにしなければいけない」と、至誠を訴え人としての生き方を強く示したものでした。

維新を成した4藩（長州・薩摩・土佐・肥前）

の中で、民衆が銃を取って戦つたのは長州藩だけです。官民挙げて諸隊を支え、後に多くの若者が銃を取った徳地は、吉田松陰が訴えた草莽崛起を初めて本格的に受け入れた所でもあります。

明治維新を語る上で誇るべきエピソードです。



諭示（東行庵）

堀伏野に置かれた代官所

さて、今回は徳地堀の伏野に置かれた代官所についてお話しします。

写真①は、江戸時代の長州藩18行政区図です。これを宰判といいますが、それぞれの宰判に役人(代官)といいますが、藩から派遣され、その役人が勤務をする所を勘場、または代官所といいました。今で言う「総合庁舎」です。当時の勘場は、行政・農林・税務・治安の地方支配の



①長州18宰判図

全てを行っていましたので、屋敷の大きさや門、石垣、塀や蔵などは、幕府や藩の権威を示す物として堂々としていたものと想像されます。

さて徳地に置かれた勘場は、堀から島地へ向かう旧道の山手にありま(写真②、③)「勘場屋敷三反」と地元では言われ、広さや石垣の規模は県内でも有数です。県文書館所蔵の絵図からは、本門や小門、床の間を持つ2つの部屋と約20の部屋、広い中庭と畳敷きの廊下、さらに3つの土蔵などが練り堀で囲まれた建物だったことが伺えます。

徳地では、元治元年(1864年)10月20日に奇兵隊・膺懲隊を受け入れ

た事件、同年10月26日の萩藩俗論派による代官交代事件、慶応元年(1865年)1月14日の膺懲隊等200名による勘場襲撃と代官追放事件、明治3年(1870年)4月7日の山口藩による脱隊兵鎮圧事件など、勘場を巡って大きな事件が立て続きに起こりました。特に文久3年9月に着任した服部半七郎という代官は、四境戦争後の慶応3年(1867年)1月まで、都合3年間も徳地の代官として倒幕を押し進める長州藩を支えます。徳地では官民挙げて藩を支える体制が出来、その後、倒幕のために多くの若者が戦いに出て行ったと思われる

す。その他、「花燃ゆ」で登場する吉田松陰の叔父「玉木文之進」や吉田松陰の実兄「杉民治(梅太郎)」も徳地の代官だったことが記録に残っています。



③本門石段跡 MAP



②伏野勘場石垣 MAP

島地と高杉晋作

元治元年(1864年)、禁門の変と下関戦争で長州藩が敗北すると、幕府へひたすら謝罪降伏して藩を守ろうとする人々(恭順、俗論派)が実権を持ち始めました。彼らは尊王攘夷を訴える急進派(正義派)を一掃するとともに第1次長州出兵が迫る中、禁門の変の責任者3家老に切腹を命じ、参謀ら11名を野山獄で斬首します。

失政への過酷なまでの追及は高杉晋作にも迫ってきました。10月25日未明、身の危険を感じた彼は萩を脱して山口へ入り、井上聞多(馨)を見舞って徳地の正慶院に山県有朋を訪ねます。10月27日の奇兵隊日記には「夜、高



高杉晋作(山口県)

杉和助(晋作)来たりで談す。夜半、富海へ罷り越す。」また山県有朋の自叙伝、懐舊記事には「二十七日、高杉は徳地の本営に来り、予(私)に会して将来の方策を議し・・・」と、この徳地で高杉晋作と将来(決起のこと)を論じたこと記されています。その後、彼は富海へ出て下関へ向かいますが、どのように富海へ向かったのかは分かりません。高杉晋作の記録が次に表れるのは10月29日です。下関の白石正一郎の日記で「二十九日昼、萩

より高杉東行君ひそかに来訪・・・と出てきます。旧暦の10月28日の未明(3時ごろ)に正慶院を出発したことは記録に残っています。徳地の寺々を組織し、急変した藩論の中で奇兵隊を受け入れた徳地全域は正義派へと傾いていたと考えられます。島地では昔から「高杉晋作は島地に泊まった。」との話がありますが、うそではないと思われれます。正慶院から島地へ、潜泊して観念寺横の山道をぬけて藤木立石

を通じて湯野温泉、それから山陽道を下って富海の大和屋政助を訪ねたのでしょう。富海に泊まった記録はありませんので、徳地の人々が協力

して高杉晋作を守り富海へ送ったものと思われる



藤木立石 MAP



島地の町 遠景



徳地には奇兵隊や志士たちを受け入れる土壌があったぜよ!

鹿野から串、山畑大野へ 新山代街道

「静かな山里が突然！」
今回はそんな話を書きま
す。

文久3年（1863年）
5月、長州藩は下関で外
国船を砲撃しました。攘
夷（外国を討つ）の決行
です。これに備えて、藩
は情報の収集と命令を素
早くするため、交通不便
な北浦の萩から山口へ藩
府を動かしました。現在
の県庁はこの時に移ったも
のです。当然、この動きで
藩内の交通網も大きく変
化しました。一番変わった
のが「山代街道」MAPです。



串 安養地付近の新山代街道 MAP

が幕末、藩政の中心が
萩から山口へ移ったこと
で、役人の動きや公用書
類、年貢、志士たちの動
きが大きく変わっていき
ます。山代宰判の本郷か
ら鹿野までの道は同じで
すが、鹿野から徳地・柚木
阿東生雲↓萩への本道（本
来の道）が、鹿野から仁
保津、串、木引谷、大野、
中・下畑、堀、漆尾峠、
引谷↓山口と大きく迂回
したので。

特に慶応2年（1866
年）6月に起こった四境
戦争（第2次長州征伐）
では、約15万人もの幕府
軍が長州を取り囲み、各
地で激しい戦闘となりま
した。このため、この新
山代街道を使って兵員や
兵糧、武器などを移送し
たものと考えられます。
きつと静かな山里に激震
が走ったことでしょう。

文久3年9月から翌年
の元治元年8月までの1
年間の仁保津・串・山畑・
堀の4村の通行量は人夫
1942人、馬215匹
と、平常の100倍以上
となった記録が残っていま
す。（なお、江戸時代の
4村合計の年間人夫数は
15人、馬数は18匹と決まっ
ていました。）



山口藩庁 大手門

新山代街道が鹿野から
串を通り、山畑、堀、
引谷へと走ったことで、新
しい時代の風（倒幕の動
きや草莽崛起の考え方）
が徳地の人々、とりわけ
徳地の若者に大きな影響
を与えたであろうと想像
されます。



山代街道詳細MAP
参考：「山代街道」歴史の追調査報告書
山口県教育委員会（著）
山口県教育庁文化財保護課（編）2002.03



全備MAP（旧街道）
参考：山口県HP（最新史回廊マップ 文化振興課）

隊士たちの学習 — 船津の水練場跡 —

「徳地の昔ばなし」に、
次のような話が載ってい
ます。

「そのころ、奇兵隊の募
集がありました。十分（武
士）にとりたててやるとい
うので、大変な意気込みで
ありました。ところが、そ
の検査たるや、まな板を
とり出して、さあ、手を
出せ！ 大上段に刀を…
そのとき、手をひっこめた
ら合格できません。」

慶応2年（1866年）
6月、約15万人もの幕府
軍が長州を取り囲みまし
た。この話は、第2次長
州征伐、いわゆる四境戦
争前夜の徳地の出来事
をおもしろおかしく子や孫
に語ったものでしょう。藩
内の慌ただしさや急ごし
らえの隊士募集の様子が
伝わってくるようです。

さて徳地では、この時期、
多くの若者が銃陣（ミニ
エー銃を使った散兵式訓
練）や剣撃（刀や槍を使っ
た訓練）の訓練を受け、
厳しい選抜の後に約300
名近くの若者が奇兵隊や
遊撃隊、膺懲隊（「諸隊」
と言います。）や徳地半大
隊（農兵隊）に志願兵と
して参加しました。

彼らの日々の生活はどの
ようなものだったでしょう
か。（「奇兵隊日記」より）

- 午前五時より七時まで
文学稽古（読書）
- 午前六時より九時まで
剣術稽古
- 午前八時より正午まで
槍術・銃陣・野戦砲射術
稽古
- 午後二時より五時まで
大砲稽古
- 午後六時より八時まで
文学稽古（読書）

実は、徳地にやって来
た奇兵隊の10月26日の記
録にも「今日より本陣に
おいて、朝夜の読書を相
始めること」と出ていま
す。先日、「松下村塾」
が「明治日本の産業革命
遺産」として世界遺産と
なりましたが、理由は近
代化を目指す若者たちの
学習の場だったからと言
われます。驚くことに、
アメリカやヨーロッパの歴
史・地理、民主主義やナ
ポレオンなども学習の内
容だったことが伝わって
います。

伝承ですが、徳地の伊
賀地船津は水練場、
二の宮神社、社務所が
隊士たちの学習場所だった
と言われます。古老の話で
は、船津には櫓を建てた穴
のある岩があったそうです。



船津の水練場跡（二の宮大橋から）MAP



周防国二宮 出雲神社（二の宮神社）MAP

農民であっても実力次第
で隊長にもなることがで
きましたので、新しい時
代のために、厳しい訓練に
堪えた徳地の若者たちの
姿が浮かんできます。



時代の夜明けを目指し、文武両道の鍛錬を怠るな！



全備MAP 詳細MAP
★…現存する史跡 ◆…現存しない史跡



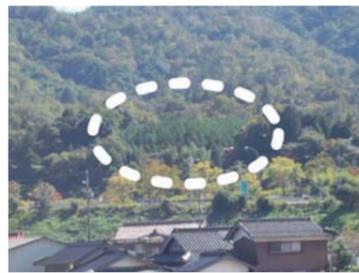
西洋と日本の砲弾の違い(小川忠治氏蔵)

徳地の奇兵隊は当時日本一の軍隊でした。今回はその話をします。元治元年(1864年)8月、奇兵隊は下関の前田砲台を守っていました。しかし、前年(文久3年)の報復としてやって来た四カ国の艦隊に激しい砲撃を受けます。結果は長州藩の完全な敗北。今までの戦い方が役に立たないことを知らされました。山県有朋は「敵が上陸して以て進むを見て大

いに悟る所あり、また、銃砲の利鈍は大いに勝敗に關係する事を学ぶ。」(艦隊から降りてきた外国の敵兵が上陸すると、ばらばらと隊列を開きながら進むのを見て大いに得るところがありました。また、銃の優劣(ミニエー銃)がはっきりと勝敗を決めることを学びました。)と、この敗北した戦いの中で、外国の進んだ戦い方を見た回顧録「懐旧記事」に書いています。当時の日本の戦い方は、集団戦法と刀と弓・槍、銃はゲベル銃でした。しかし山県有朋は散兵式(個人戦)とライフル式の銃のすごさを見抜いたのです。ここに二つの銃の命中率を比較してみました

射程距離	ゲベル銃	ミニエー銃
100m	70%	95%
300m	15%	55%
400m	4%	50%
最大射程	1~300m	6~800m

奇兵隊士の金子文輔の日記では「馬関(下関)の戦争より、両隊(奇兵隊・鷹鷹隊)共、弓・槍隊を廃し、専ら西洋風銃隊に編成し……(県文書館蔵)と、下関戦争後、急速に西洋化した様子を書いています。敗戦後わずか3ヶ月で、徳地に駐屯した奇兵隊と鷹鷹隊は、最新のミニエー銃で武装して実



小古祖「麓の河原」(散兵戦術の訓練場)MAP

戦配備されたであろうと推測されます。また、散兵式の銃陣訓練が澄月院の上、「麓の河原」MAPで行われたことも奇兵隊日記に書かれています。第2次幕長戦争(四境戦争)の時、15万人の幕府軍に対して約3千人の長州軍が大勝しましたが、その武器と戦術の原点がここ徳地にあったことが分かります。

全備MAP

詳細MAP

西洋列強との戦いで長州は大事な事を学んだのじゃ

◆…現存しない史跡

要塞のような徳地堀の陣構え

今回は徳地の堀地区へ駐屯した奇兵隊の陣構えについて話をします。日々の生活をしていると、住んでいる徳地がそんなにすごいとは思いません。しかし奇兵隊軍監の山県有朋は、三田尻から転陣・駐屯する理由を次のように書いています。「屯陣の地形を案ずるに三田尻は……諸人の注目を惹く恐れあり、之に反して徳地は山間に位するも兵を国境に出すに於いて又山口に往来するに於いて両ながら其便ある」(陣を置く地形を考えると、三田尻は多くの人々の注目を浴びることとなる。これに反して、徳地は山間部にあつて、

兵を石見の国境に出しても山口に行くにも大変便利がよい。)(懐旧記事)より) 飛行ロボット「ドローン」の眼になったつもりで検証してみましよう。二の宮神社前の二の宮大橋から堀方面を見ます。遠くに中国山地がかすんで見えます。「ドローン」の機体をさ



金徳寺からの眺望 MAP

して、山県有朋は徳地で戦うことを決めました。「おたまじゃくし」の頭の部分を防府方面から見ると、両側から山が大きくせり出して庄方の金徳寺(MAP)第三銃隊、須路の宗徳寺(狙撃隊)、伏野の正福寺(鷹鷹隊)を山陰に隠します。しかも本陣の正慶院を含む小古祖方面の4隊は、平地の途中のせり出す山(くびれ部分)に隠れて見えませ



澄月院からの眺望 MAP

ん。しかし、現消防署の上辺りに陣取る澄月院(MAP)第一銃隊)からは、堀地区全域が見わたせ、三田尻から入ってくる幕府軍の動きは丸見えとなります。山や川などの地形を巧みに利用して、幕府軍と戦おうとした奇兵隊の陣構えはすごいとか言えません。今一度、徳地の地形を見直して、幕末へタイムスリップをしてみませんか。

全備MAP

詳細MAP

☆…名称が変わった史跡 ◆…現存しない史跡

柚木刀迫の砲台跡 —四境戦争—

大村益次郎が造ったといわれる砲台と硝煙小屋の跡(伝承)が徳地柚木にあります。

慶応2年(1866年)6月5日、幕府は長州藩

に対して15万もの兵で総攻撃を開始しました。第2次長州征伐、いわゆる四境戦争です。「徳地の昔ばなし」(徳地町教育委員会発行)には「津和野口からいつ敵が攻めてくるかも分かりません。兵火の難に備えなくてはなりません。(村人に対して)『二つ切り』が鳴ったら用意をせい、『三つ切り』が鳴ったら竹槍と鎌をかついで出てこい、の布令です。大切なものは井戸へ下ろしました。としゃくの中へかくしました。」と、その時の切

迫した様子が描かれています。徳地の柚木には石見街道の出口がありますので、非常に緊迫した状態にあったであろうと想像できます。

大村益次郎は優秀な科学者でした。その彼が、石見方面の総大将として石州征長軍(福山藩・鳥取藩・松江藩・浜田藩・津和野藩)と戦ったのは有名な話です。当初、石州征長軍が攻め込む所として、藩庁の山口に近く、長州藩を二つに分断する徳地を考えたのでしよう。征長の



中央奥「賽ケ埵」(手前は柚木小学校)

大軍が攻め込んでくる所とみた柚木の石州街道出口を睨み、山代街道と重なった刀迫の賽ケ埵に砲台を築いたといわれています。



県境「仏埵」からの柚木部落眺望

和野藩は長州藩に協力します。長州軍は津和野の領地を通り、浜田藩の益田で戦って大勝したのは史実の通りです。



徳地の村人たちは総出て幕府との戦いに備えたのじゃ!

8歳の志願兵 —島地山畑村—

慶応元年(1865年)11月のこと、島地山畑村の農民25名が大庄屋宇多田四郎兵衛に銃陣稽古の参加を届けたことが残っています。



宇多田家文書(慶応元年9月) 山口県文書館蔵

慶応元年11月は第2次幕長戦争(四境戦争)の半年前です。島地山畑村の農民たちも長州藩の危機を救うために立ちあがったのでしよう。ところが、この届出に元服(14歳)前の子供6名が参加しているのです。最年少は8歳の鷹之進、次いで9歳の良蔵...。どうしてこんなことが起こったのでしょうか。

古仕り度く望むもの、これ有り候はば、世話方仕り候よう膺懲隊より御申し相成り候に付き、心遣い仕り度く存じ奉り候(このようなき候事)で銃陣稽古を希望する者がいたら世話をするよう膺懲隊から申し入

た部隊です。「大田・絵堂の戦い」直後に、諸隊兵200名と共に大砲小銃を携え、徳地勘場を攻めて俗論派の代官を追放し島地の守備を任せられます。その後、隊員規則の「諭示」をもつて草莽崛起を訴え、人々の信頼を得たと思われま。郷勇隊の者は、おのずから撃剣場へ罷り出、農家の小児は学校へも参り教えをうけ候様なづけ申すべし(ふるさとを守る人は自分から訓練場へ出るよう、農家の子供は学校へ行って教育を受けるよう慈しみ教えること)。これは「諭示」の第7条。



徳地半大隊兵名録(慶応2年5月) 山口県文書館蔵

5月には、徳地半大隊(郷土防衛隊188名)が編成されます。名録の記載を見ると、徳地の全域から若者が参加すると共に、各村々の寺も部隊へ協力する体制を整えたことが分かります。8歳の子供までが志願する幕末徳地の高揚感と人々の心意気、そして新しい時代に向かつて進むとうすまでも宇多田家の古文書から読めそうです。



志があれば、子供も大人も立ち上がれるんじゃ!



徳地の村人たちは総出て幕府との戦いに備えたのじゃ!

徳地の隊中様

たいちゅうさま

―帰郷した諸隊兵―

明治2年(1869年)5月、北海道五稜郭の戦いで江戸幕府は倒れて明治維新となります。長州藩から戦いに出ていた約5千人の兵も、それぞれの戦地から意気揚々と凱旋しました。

この年、朝廷から12万石を超す賞典(ほうび)が支給されました。徳山藩の年貢年収が6万石ですので、その賞典額は莫大なものです。しかし諸隊兵に支給されると期待した「ほうび」は山口藩(毛利家)に入り、農民出身の隊士にはわずかしき支給されませんでした。しかもその配分を巡って要求している最中に、藩と諸隊幹部との不正や軍編成とが重なって

山口藩は大混乱となりました。この時の処遇に不満と不信を抱き、多くの諸隊兵が自分の意志で隊を離れます。「脱隊」です。そして明治3年2月9日、強硬な姿勢を貫く脱隊兵に対する鎮圧事件が起こるのです。山口藩は木戸孝允の命令で、反乱を指導したとして約40人を野山獄や萩大谷・山口柵で処刑しました。

その後、山口藩は農民と脱隊した兵とが結びつく「一揆」を極度に怖れました。藩(県)内全域にわたって、少しでも不穏な動きがあれば「再挙の恐れ」を口実にして厳しい取り締まりを行いました。事件が起こった明治2



串遠内 人丸神社遠景
「徳地の隊中様」殉難の地

年と3年はひどい凶作でした。ここ徳地でも、年貢取り立てに苦しむ農民に添おうとした徳地出身の帰郷諸隊兵の動きに対して藩(県)は厳しく対し、多くの若者を反逆者として歴史から消していきま

た。殉難者となった徳地の若者たちも無名ではありませんが、志願して維新の改革へはせまじ、新しい日本の国づくり



山口市平川 小出部落
「隊中様」慰霊祭

へ身を挺した誇るべき先達です。明治維新150年の顕彰にあたっては、名をあげた人は勿論ですが、脱隊兵として地元で非業の最期を迎えた者も「徳地の隊中様」として祀り、供養することでその霊に報いたいものです。〔山口市平川の小出部落では、明治3年2月9日に戦死した藤山佐熊(22才)を「隊中様」として毎年4月9日に集落をあげて慰霊祭を行っています。〕

幕末徳地の偶然 ―奇兵隊転陣の意義―

幕末長州と言え、萩市や下関市、山口市や防府市がいつも話題となりますが、実はここ徳地も幕末の大きな舞台となりました。シリーズの最後としてまとめてみましょう。

明治維新は、東アジアの小国「日本」が徳川幕府を倒して、西洋先進国と肩を並べた大事業・大変革でした。それは長州、薩摩、土佐、肥前の西国4藩を中心に進められました。中でも長州藩は、他藩に先駆けて下関海峡で米・仏・英・蘭の四カ国艦隊へ砲撃を仕掛け、攘夷(外国を打ち払う)を決定したのです。しかし結果は完全な敗北でした。この敗北をきっかけにして、新しい考え方が藩内に生まれてきます。それが身分を超えて志ある者が銃を持つ《奇兵隊》

と軍備の急速な西洋化そして倒幕を成し遂げることでした。

元治元年(1864年)の長州藩は、藩庁の移転を含めて大混乱となっていました。それは、下関戦争での敗北、京都での敗北(禁門の変)、第1次長州征伐決定などで、保守派(俗論派)と革新派(正義派)とが激しい権力争いを繰り広げたのです。その混乱が、歴史の流れとは無縁の静かな「徳地」を、突然、歴史の表舞台に押し出してきたのです。

元治元年9月4日、奇兵隊日記に《徳地》の文字が、突如現れます。その後、次々と《徳地》が出てき、10月20日、奇兵隊が徳地へ転陣・駐屯をします。そこには、



槍(銃)部隊の「妙楽寺」跡
[堀深谷] MAP

- ① 芸州口から萩へと繋がる山代街道が、鹿野から串下堀を通じて山口へ繋がったこと。
- ② 第1次長州征伐の決定で、石見藩と接していたことから国境の町となったこと。
- ③ 俗論派と幕府軍に對峙するには、堀の地形(山や川など)が戦略上有利だったこと。

さらには、幕末の歴代徳地代官が正義派で固められていたことなどが徳地転陣の背景となったのでしよう。藩の役職名簿や奇兵隊日記には、山田宇右衛門、玉木文之進、松島剛藏

(楫取元彦の兄)、服部半七郎、山県有朋、高杉晋作、時山直八、中岡慎太郎(土佐藩士)など、正義派のそうそうたるメンバーが《徳地》の地名と共に現れます。

幕末の偶然は「徳地」を歴史の激流に置きましました。しかし、それは輝かしい日本の近代化への歴史に、ふるさと徳地が大きく貢献をした歴史として誇ってもよいのではないのでしょうか。(完)



堀(濠)に見立てた佐波川・島地川
[堀出合付近] MAP



まつこと薩長の力を合わせならんぢや!

